
世継ぎ問題（仮）

佐々木 沙女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世継ぎ問題（仮）

【著者名】

佐々木 沙女

【あらすじ】

優秀で民に慕われている女王陛下が治める帝國、しかし、世継ぎが居ない問題が勃発。彼女が中々踏み出せない問題だったが……。

その1（前書き）

こつまでも続けられるか、わかりませんが。

その1

「陛下。いい加減にして下さい。

わづ、この事は国をあげての一大事なのですか？」

「分かっている。」

「お分かりなら、何故私の意見を聞いて頂けないのでしょうか……」

宰相様お可哀想に……と誰しもが同情の眼差しでみていた。

「いつも言っているではないですか、世継ぎがいないのですから、

養子なりるとか……

なんなら今からでも産みますか？」

「それもいいかもな」

「はづ、やつですか。じゃあ、やつをひと相手見つけて産んでください。

いつもの様に宰相様が、はぐらかされて終わりだ。
しかし、今日は違った。

「ジル。

その問題だが、解決しようと思つ。

四公を呼んでくれ。」

あまりの驚きに、宰相ことジルバート・スチュワートは思考が止まつた。

「えつー？本当にですか！？！」

「ああ。」

間髪入れずの返事に、今度はその話を聞いていた者達が驚きの声をあげた。

その2

『四公』とは、大貴族である。

大貴族とは、北のアルバース公爵、南のクラウス公爵、東のグルーヴィー公爵、西のステリア公爵 を総称して『四公』と呼ばれる。

数日後。

王の執務室に、四公が集まつていた。

北のハルビル・アルバースは代々武将の家柄で、体格のよい大男。黒髪の短髪で顔には傷がある。

「ジルがとうとう陛下が腹を決められたと言つていたが、本当か？」

南のブラウン・クラウスは、知識人の為学問に多くの力を注いでいる。少し長めの胡桃色の髪で、眼鏡を掛けている。

「ええ。私にも実に嬉しそうに話しておいででしたが。」

東のアマリリス・グルーヴィーは、四公の中で唯一の女性である。本来ならば、男性継承である公爵家を継ぐ事を特例で認められている。栗色の長い髪で、可愛い顔をしているが中身は…。

「ジルの被害妄想でなくて？」

いつも、あの御方はジルで遊ばれているじゃない。」

西のジーク・ステリアは、最も領民からも慕われている。ある意味顔で…。茶髪で派手な顔立ちをしている。若い頃はさぞかし遊んでいたと言つ噂。

「さあ、それは我らが陛下に会つて見ないと眞実は分からぬよね。

「

執務室の扉がノックされ了承の返事もなく開いた。

この部屋の主であり、ライヴィ国の中でもある国王 ティアナ・ラグナロス が金髪の長い髪を靡かせながら、宰相ジルを伴つて入つて来た。

「わざわざ遠い所を、すまないな。」

「いいえ、陛下のお召しおあらば私はどんなに遠い地に届りましても、すぐに飛んで参りますわ。」

「アマリリスの陛下顕眞がまた、始まつたな。」

陛下に引っ付いて離れないアマリリスを皆が呆れた様子で見ていた。陛下は宰相に用配せし、何とかアマリリスを落ち着かせて、椅子に座らせた。

ティアナは疲れた顔で、紅茶を一口飲んだ。

「今日集まつて貰つたのは、ジルから聞いていたと思つが……」

「では、お決めになられたのですか。」

興味津々な顔で、クラウス公が尋ねた。

「どうしたらよろしく思つ?」

「はつ?」

「……。」

部屋の中に静寂が訪れた。

その4

部屋の中に静寂が訪れた。

一番早く正氣に戻った宰相」とジルは、沸き上がる怒氣を抑えることが出来ず叫んだ。

「陛下あ！！

あなたつて人は、毎回毎回私で遊んで良いと思つてんですか——！

「楽しいではないか」

「…………。」

四公達は、また陛下の宰相弄りが始まつたと、微笑みを浮かべその場が和んだ。

本人は、ジルの怒りを気にもせず優雅に紅茶を啜つていた。

一頻り陛下の愚痴を言つたことで、宰相」とジルは落ち着きを取り戻した。

同郷の誼よしみでハルバース公が最後まで、聞いてあげることは最早お約束である。

「さて、恒例のジル弄りも終わつたことだし、陛下そろそろ本題に入つて頂けないでしょうか？」

「ジーク、お前は私に話かけるなといつも言つているだらうが……！」

ステリア公」とジークが、陛下に話しかけた事によつて部屋の温度が一、二度下がつたのは氣のせいではない……。

その5

ステリア公と陛下は仲が悪い。

昔はそれほどではなかつたのだが、いつの間にか一人は犬猿の仲になつていた。原因は不明だ。

「まあまあ、落ち着いて下さい。

あなた方がケンカを始めてしまつたら、終わらないでしょう。」

言葉は優しいが表情が怖い。

「『ごめんなさい。』

ブラウン・クラウス公は普段は優しいが怒らせると、恐ろしい目にあうと経験上分かつてゐるので直ぐ様二人は謝罪した。

咳払いをし、

「早速、本題に入る。

以前からジルや皆が心配している世継ぎだが、そなた達の子を貰えないだらうか？」

「私は喜んで差し上げますわ。私と陛下の結びつきが益々強くなりますわよね。」

アマリリストが、嬉々として言った。

。

「クラウス公、アルバース公、ステリア公 アマリリストはこう言つてゐるが、別に強制ではない。
意見を聽こう。」

思案顔でクラウス公が発言した。

「それは我々だけの一存では申せません。

本人に聞いてみなければお答えしかねますが。」

クラウス公の意見にアルバース公、ステリア公も賛同した。

「それは最もだ。

本人に国を受け継ぐと言う強い意志がないと、民が哀れだ。」

ジルに目配せし、皆の前に紙を置いた。

「一通りの条件は書いておいた。それを基に検討をしてくれ。」

一ヶ月後此処に何人集まるかな？
と、意地の悪い笑顔を浮かべ皆を見送った。

国王の条件

四公に渡された書面の一
部抜粋。

- 、國を愛すこと
- 、民を虐げない
- 一、公爵家の後継ぎではない者
- 、男女問わない

執務室を出た後、控えの間に来ていた。

「何だこんな簡単でいいのか？」

条件を読んだ後、拍子抜けした。

「ハルビル簡単が一番難しいのですよ。」

ため息を吐きながらアルバース公に注意した。
単純だからこそ、おろそかにするが出来ない。おろそかにすれば民
は離れていき、國などなくなってしまう。

「うつ、分かつていてるよ……、多分。」

深く考えずに言つた事に、反省した。

「そうね……。陛下の中に常にあるのでしょうかね。」

國などに縛られて、可哀想な人……。」

最後の言葉は、憐れむものではないが、彼女の本心だったのかも知
れない。

「…………」

「ところでジークは、何処行つたんだ?」

「そうね。

来る時は一緒に居たはずなのに、いつの間に…」

「さあ、愛しい人にも会いに行つたんじゃないですか?」

その6

天気は快晴。
まるで未来ある若者達を応援している様な天気だなど、ティアナは
思った。

謁見の間に正装し玉座に座る彼女の前には、決意を決めた者達が居
た。

北のハルビル・アルバース公の三男 ビルズ・アルバース（14）
焦げ茶色の少し長めの髪で、母親似な彼はそわそわと落ち着きがな
い。

東のアマリリス・グルーヴィー公の長女 マリア・グルーヴィー（
15）母親譲りの栗色の髪で可愛い顔をして、堂々としている。

西のジーク・ステリア公の長男 カイル・ステリア（16）金髪で
甘い顔立ち、父親似ている。

同じく長女 リリア・ステリア（16）茶髪で兄と同じ顔している。
双子だ。

南のブラウン・クラウス公は、適任者がいないと断りがあったのを
了承した。

全員が揃つたのを確認し、陛下が挨拶を始めた。

「まず、皆の気持ちに感謝の言葉を贈ろう。」

「ありがとうございます。」

深々と頭を下げる。驚いた。

国王が下の者に頭を下げるなど聴いた事がない。

少しの動搖を感じとつたティアナは

「この礼は国王としてではない。

ティアナ・ラグナロス個人が感謝を述べるのだ。」

世継ぎが原因で、要らぬ苦労を掛ける若者達にせめてものお詫びの気持ちを込めて…。

「事前に報せた通りこれから城で、勉学に励んでもらいたい。早速、明日から始めるに当たって何か質問があるか?」

勢よく手を挙げたのは、マリア・グルーヴィーだ。質問したくてさつきからウズウズしていた。

「お聞きしたいのですが、何故ステリア公だけお一人なのですか?」
マリアの質問は謁見の間に居る誰しもが思つたことだ。
条件には一人だと決められていたはずなのに。

「私もお聞きしたいのですが。

ステリア公にお子様が二人のはず、どちらかが公爵家の跡継ぎですよね?」

宰相ジルも、困惑氣味に聞いてきた。

「一人だと言つたんだかな?」

ステリア公もどちらに後を継いでもうか悩んでいると言つていた。
両方優秀であるが為に決めかねていたらしい。

そこに今回の話が舞い込んできたので、これ幸いにと二人を送り込んだ。

もし双子のどちらかが選ばれた場合、選ばれなかつた方が領地に帰り後を継ぐ事になつてゐるそうだ。

あまりに粘るので、全領民の了承が得られたのなら特例として認めると言つた。

「それで、これが結果だ。

あいつの顔に領民は、騙されている。」

ティアナは不貞腐れてしまつた。

不可能を可能にする男の子だ世継ぎにはぴったりなのかも知れない。
と周囲の者達は密かに思った。

「君達の未来が、この国を書き方向へと導いてくれる事を願う。」

ビルの決意

ビルズ・アルバースは、ハルビル・アルバース公爵第6子としてこの世に生を受けた。

女3人、男2人子沢山なアルバース公ではあつたがビルを可愛がっていた。

母、兄や姉達も年の離れた弟を可愛がった。

末っ子で可愛がられてはいたが、我が儘にはなれなかつた。忙しい家族を気遣い、家で大人しくしていた。

その性が、人見知りが激しく家からあまり出なくなつていた。しかし、いつまでもこんな性格ではダメだと感じていたが自分では、どうにもきつかけが掴めなかつた。

そんな時に今回の話が舞い込んできた。

「ビルズ。

あのさ、陛下に頼まれたんだけど、お前さえ良ければ、俺はビルズを推したいと思っているんだかどうか?」

父が僕をおしてくれるだなんて、驚いた。

まだまだ、小さい子供扱いだと思つていたのに、嬉しかつた。

「父上、僕でいいのですか?」

「ああ。

お前はまだ小さいが将来は大物になりそいだからな。」

笑顔で頭を乱暴に撫でられた。

「ゆっくり考えるといい。但し、自分の可能性を諦めるなよ。」

父の最後の言葉が突き刺つた。

その後の事はあまり覚えてない。気付いたら自分の部屋にいた。父には自分の悩みなど筒抜けなんだなと、窓から覗く月を眺めた。

いつまでもそうして居たかったが、来客を知らせるノックが響いた。

入って来たのは、母だった。

「ビルズ、あなたご飯も食べないなんて心配するじゃない。」

「ふりふり怒りながら、夜食を持ってきてくれた。」

「母上、すみません。食欲がなくて…」

「旦那様が言つた事気にしてるのね。」

「……。」

「貴方が産まれたのが遅かつたじゃない？」

「旦那様は上の子達が産まれた時、お城で仕事していたから一緒にいたれなかつたの。だから、子育ては私任せでね。貴方が出来たつて分かつた時、自分が育てるんだつてはりきつたのよ」

可笑しそうに、笑いながら語つてくれた。

初めて聞く自分が産まれる前の話。

「こつちに戻つても忙しさは変わらなかつたけど、少しでも時間が出来ると、貴方の顔を見に来たの。」

私どもが好きなのって、喧嘩した事もあつたのよ

何だか容易に想像出来てしまつ夫婦喧嘩だ。

最後はお前が一番だよつて言つてくれたのよつて恥ずかしそうに告白した。

「あなたは私達の自慢の息子なのだから、自信を持ちなさい。」

言つだけ言つて母は部屋から出でていつた。

心配をせてしまつた。

母は元氣のない僕を気遣つて励ましてくれた。

小さい僕の世界を広げる為に父なりに、考えててくれていた。後は自分が決めるだけ、心が少し軽くなつた。

お腹すいた。

その日の母の、ご飯がいつもより美味しい感じた。

「いってきます。」

「いつでも帰つていらっしゃい。

待つてるから」

優しい母の言葉に見送られて旅立った。

マリアの憂鬱

「はあ。もうダメ。
どうしてあれが赦されているのかわからないわ――――！」
マリア・グルーヴィーは叫んだ。

「まあまあ、お姉さま落ち着いて下さいな。
一つ下の妹アリア・グルーヴィーは、姉の苛立ちの原因が分かるら
しく優しく声をかけた。

「アリア、私は我慢の限界なの！――！」

バンバンと机を叩いて憤っていた。

「あなたはいいの？」

「いつも言つてるではありますか。

人それぞれなのですから、私達が何を言つても変える事は出来ない
と。」

姉のマリアは、気性が激しい、妹のアリアはおつとりとしている。
姉妹は正反対の性格をしていたが、仲がよかつた。

「それに陛下が赦されているのですから。」

それがそもそもの原因だ。

何故、容認されている。國家規模の陰謀、それとも、もっと別の何
かなの。

一人悶々と、考えを廻らせていると

「そうそう。

それに、母さんが折れる訳ないよ。」

今まで傍観していた一つ上の兄アギト・グルーヴィーが話に入つて
きた。

「母さんなんて呼ぶんじゃない――！」

マリアは母アマリリス・グルーヴィー公爵のことで怒っていたのだ。
と言つてもマリアが一方的に怒つてゐるだけであつて、アマリリス
は氣にもとめていない。

兄のアギトが何氣なく言つた。

「それならいつそ王様にでもなつたら？」

「そんなの無理に決まつてんでしょう。」

と、その場は笑い話で終わつた。

後に、この話は現実に近いものとなるのは今はまだ誰も知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6663z/>

世継ぎ問題（仮）

2011年12月25日18時47分発行